

タイトル：2019年度 研究セミナー（第20回）

日時：2019年12月21日（土）～22日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階マルチメディアセミナー室(306)

「イブン・ハルドゥーン『実例の書』における王朝論の構造と変容」

荒井 悠太（早稲田大学大学院文学研究科 博士後期課程）

二年間の留学を終えて帰国し、博士論文の構想を具体的に練り始めた折、同セミナーへの参加を勧められた。手を付けて間もない博士論文の構想に捩入れをするまたとない機会であり、応募することを決めた。個別の業績や未発表の題材はそれなりに揃ってはいたものの、それらを一つの博士論文としてまとめあげる作業は途方もないものと感じていた。それについて多くの先生方からの批評を頂ける貴重な機会となった。

私の博士論文は、歴史家イブン・ハルドゥーンの主著『実例の書』の研究史批判・文献学的考証・歴史学的研究を組み合わせるものとなる予定であるが、セミナーにおいては研究史批判に基づく問題提起、そして王朝論に焦点をあてた分析の一部を報告した。

通常の学会報告よりもはるかに潤沢な報告60分、さらに質疑60分という時間のなか、多様かつ有益なご指摘・ご助言を多々頂けた。個々の概念等に関する基本的な点から、博士論文の結論はどうなるのかといった長期的視野に立つものまで様々であった。とりわけ、文献学的考証と歴史学的研究をより密接に関連付けるのが望ましいとの指摘は、博士論文全体の一体性をより高める上で大変重要な指摘であるように思われた。

自身の報告は初日の最初ということで、非常に緊張する日程であったが、それが終わった後は緊張も解け、他の参加者の報告をある程度の余裕をもって聴講することができた。他の大学院生の報告を時間をかけて聞ける機会も貴重であり、内容の興味深さもさることながら、分析手法や論の構築など技術面で参考になった点も多い。質疑応答も活発に行われ、会場の寒さ（エアコンが不調であったらしい）も忘れるほどであった。またセミナーの最後には例年「私の博士論文」という報告があり、第一線で活躍される研究者の方の具体的な体験談を聞くことができる。執筆を続ける上での悩みやモチベーションの維持など、普段聞くことのない話に大いに共感を覚えた。

昨年度に続き、受講者は多くなかったようであるが、実際には博士論文を構想する段階に入っていなくても積極的に参加した方が良いように感じられた。多様な観点からの助言を得られることで、早い時期から研究の地歩を固めることにつながるはずであり、後輩達にも参加を推奨してゆきたいと思う。今回お世話になったセミナーに携わる先生方、事務局の皆様には厚く御礼を申し上げたい。